白の騎士 VS 戦場の死神

犬吉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
白の騎士　ＶＳ　戦場の死神

【Ｎコード】
Ｎ２２７２Ｔ

【作者名】
犬吉

【あらすじ】
ＩＳと某作品のクロス。
ＩＳ〈白騎士〉と、「対すれば必ず死ぬ」とされた戦場の死神との戦い。
太平洋上で激突する二機。果たしてその結末は？
短編、一発ネタです。
この作品はＡｒｃａｄｉａにも投稿されています。

（前書き）

クロス物だと、力関係が難しいです。
これなら互角だろう、と個人的に思った物をチョイス。
それではどうぞ。

某月某日。

突如、世界１２ヶ国の軍事コンピューターが同時ハッキングされ、そして日本に向かって、二千発以上ものミサイルが発射された。

最早、誰にも止められない。

この世界から、一つの国家が消滅する――――　誰もが絶望し、神の奇跡を祈った。

そして――――　それは現れた。

白銀の鎧を見に纏った少女。その手に大剣を携えて、一人空中に佇む。

「……」

バイザーで顔を隠し、その表情は晒された口元にのみに見えた。

眼前に迫る無数の、破壊をもたらすもの。

彼女は手にした刃を構え、一瞬で加速。その半数を斬って捨てた。

更に距離のあるものに対しては、大型荷電粒子砲を呼び出し、すべてを薙ぎ払ってみせた。

ＩＳ。
正式名称【インフィニット・ストラトス】。
宇宙開発用マルチフォームプラットスーツであるそれは、現行する全ての兵器を上回る。
そう発表された時、世界の反応は冷ややかだった。
だが、二千以上のミサイルをあっという間に破壊するその性能。
正しく謳い文句に偽りなし。
『目標の分析。可能ならば捕獲。無理ならば――――　撃滅』
そして世界は――　愚かにも、世界最強の機動兵器に戦いを挑んだ。

「あ〜あ〜、だから忠告したのに……”あれ”には通常の兵器なんかじゃ、歯が立たないって」
アメリカ軍空母【エイブラハム・リンカーン】内にて、白衣を着た一人の青年が呆れ気味に呟いた。

その胸には、彼がＮＡＳＡ所属の科学者、【クリント・ハワード】であるということを証明するＩＤカードがあった。

「うるさい！　ここは民間人立ち入り禁止だ！！」
艦橋にて送られてくる撃墜報告の数々。館長の苛立ちも仕方ないことだ。
「艦長、そろそろ我々も出撃しますよ」
「黙れといった筈だ！　ＮＡＳＡの作った玩具が何の役に立つ！？」
「そうですねぇ〜……」
クリントは顎に指をやって考える素振りを見せてから、こう答えた。
「無敵を気取るあの騎士に、一泡吹かせるぐらいですかね？」

「っ……！？　ふざけるな！！　あの化物に……一泡吹かせるだと……！？」
「えぇ……流石に撃滅というのは難しいでしょうけど……どうです？　私達に出撃の許可を頂けますか……？」
「っ……だが、我々にはプライドがある……！　アメリカ軍は、最強の軍隊足らねばならんのだ……！」
「それは、私達が出ようと出まいと……既に終わっていますよ？」
「ッ……」
ギリッ。と、ゴツゴツした拳が握り固められる。

戦闘が始まって、数時間。
友軍の被害は留まることを知らず。しかも一人として死者がいない。
彼の言う通り、既にこの戦いは敗北だ。それも完全なる、絶対的な敗北なのだ。

プライドも何も無い。全てが粉微塵に砕かれた。
その上で、それでも縋るものなどあるのだろうか。

「……奴に」
吐き出すように、言葉が出る。
「あの騎士に、一矢でも報いることは可能なんだな……？」
「――　えぇ、その通りです」
彼はそう返した。それが当然の事であるかのように。

「向こうが【究極の機動兵器】なら、こちらは【究極の戦闘兵器】ですから」

「――　分かった。《EH-？》の出撃を許可する……！」
「了解」

「お待たせ。出撃の時間だ」
『もうっ、遅すぎよ……！』
「そう言わないで欲しいな。オーダーは？」
『C&Bで行くわ』
「分かった。ガンポッド、セット急いで！！」

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

「やれやれ。いい加減諦めてくれると楽なんだがな……」
また一機の戦闘機を撃墜し、騎士は独りごちる。

もう夕方。
日没になれば、この茶番も終わりだ。
出来るならその前に退却して欲しいものだと、騎士は思った。

――　ｐｉｐｉ！

バイザー型ハイパーセンサーが、高速で接近する機影を捉えた。
速度――　音速レベル。接触まで残り１５秒。

――ィィィィィイイイイイイイイイイイイイイッ！！

「来るっ……！」
凄まじい音と共に、ハイパーセンサーが、それを捕捉した。

それは一見すれば、昆虫のような印象だった。
カラーリングは青。前に細長いボディと、ウイング一体型だろう大型スラスター。
そして機体下部には大口径の大砲。正面の顔のような部分には悪魔の様なツインアイ。

「何だあれは……っ！？」
上空から降り注ぐ弾丸。それが騎士の鎧――シールドバリアーを打

ち叩く。

『ウソっ！？　《白騎士》のバリアーを削った……！？』

「落ち着け。ほんの僅かなダメージだ」

騎士の言う通り、受けたダメージは微々たるもの。しかしそれだけでも、通信の向こうの少女は驚愕だった。

絶対不可能な筈の事が、二つ同時に起きたのだから。

すなわち、【白騎士に当てる】事と【バリアーを削る】事だ。

異形はそのまま、白騎士の横を抜けて行く。

「やるな……だが！」

白騎士はすぐにその後を追って飛ぶ。

「戦闘機である以上、背後を取られれば……！」

超音速で飛ぶ白騎士はあっという間に、異形の背後を取った。

そしてその手にした刃を刺突に構える。

戦闘機の機動性能では、白騎士には勝てない。

超音速飛行に加え、急速旋回能力。更に、その状態での格闘戦能力。

それこそ、白騎士が戦闘機を超える戦闘力の持ち主である証。

だが、今度の敵はそうは行かなかった。

「っ――！？」

突如として、二機のスラスターが強烈なバックファイアを放ち、更

に速度を上げたのだ。

あっという間に、白騎士は突き放される。
それだけではない。そこから上昇して、一気に切り替えしてきたのだ。

「何っ！？」

『まさか……ううん、ＰＩＣであんな質量をコントロールは……まさか、ＵＧＤ（アンチ・グラビティ・ドライブ）！？』

ガコン、と異形の大砲がこちらを捉える。
その機動に驚き、反応が遅れてしまう。回避は間に合わない。すぐに防御態勢を取った。

ドォオオオンッ！

「つぅ……ッ！！」
爆圧が、白騎士を揺るがす。更に二発、三発。
大砲が火を噴く度、大型の薬莢が排出されて海へと落ちていく。

「これ以上は……食らってやれん！」
追撃をすぐに飛んで躱し、一気に加速してその距離を離す。

が、向こうもスラスター出力を上げて、それを追い駆けた。

背後から機銃、そして大砲の弾雨。
それを回避しつつ、反撃のタイミングを狙う。

『ちーちゃん、最高速度はほぼ互角……機動力は白騎士の方が上だけど、火力は向こうが上だよ』
「バリアーは抜かれる、か？」
『すっごくムカつくけど……直撃すれば抜かれる』
「なるほど……」
白騎士の覗く口角が、「にぃ」と歪む。
うなじがチリチリとする。絶対的な防御能力と機動力を誇るＩＳ。
それはどんな兵器も及ばない領域だ。

だからこそ、ミサイル撃墜以降の彼女の戦闘は作業的だった。
自分の命はどこまでも保証され、ただ敵――　敵と呼べる存在ですらない相手を、殺さないよう気を使うだけの作業。

だが、この敵は違う。
自分を落とせる――　自分を殺せる相手なのだ。
『どうするの、ちーちゃん？　予定より早いけど……撤退する？』
「――　何を言っている？」
『ちーちゃん……？』
「ようやく……面白くなってきたところだ！」

白騎士は砲撃を躱すと、一気に減速。異形の真横へと付く。
火力は向こうが上。荷電粒子砲は大型でこの速度では使えない。
だったら、敵の武装の内側――　至近距離。

どれだけの火力も、戦闘機である以上は格闘戦は出来ない。
この距離。このタイミング。外しはしない。
「ハァアアアアッ！！」
振り抜かれる大剣。それが火花を散らした。

バチィイイイイイイイッ！！

「っ……！？」
異形の振るったレーザーブレードによって、防御されて。
いつの間にか大砲が消え、その代わりにあったのはブレードだった。
そして、それを振るう――　一本の〈腕〉。
「マニピュレーターアームッ！？」
機体下部から伸びる腕がグルンと回ると、レーザーブレードがいきなり伸びて、白銀のボディをかすめた。
「面白い……格闘も出来る戦闘機か……！！」
二機は同加速度のまま、互いの腕を振るい合う。黄昏に染まる空に幾度と無く火花が散る。

大剣の切っ先が、異形のボディをかすめて傷を刻めば、レーザーブレードが白騎士の肩部アーマーを斬って捨てる。

「フフフ……ハハハハ……ッ！！」

白騎士は笑っていた。

自在に空を舞い、人に翼を与えるＩＳ。それと拮抗する力。

ギリギリのラインで迫り来る、命を刈り取る死神の鎌。

恐怖と共に、これ以上無い程に興奮する。

バチィンッ！　という激しい激突と共に、二機が弾けるように離れる。

「っ！？」

白騎士がすぐさま態勢を立て直し、異形へと再び挑まんとする。

そこに目掛けて、砲撃と機銃。

その弾雨に対して――　剣を盾にして突撃。下手に回避すると立て直されるからだ。

現に、この攻撃の殆どは明後日の方向に飛んでいる。

足を止めさせるだけの弾幕だ。

「行くぞ……〈一つ腕〉ッ！」

一気に加速して、白騎士が刃を構える。対する〈一つ腕〉も、弾幕を機銃に任せて大砲を格納。同時にブレードを出現させた。

太陽が、海の向こうへと沈んでいく。

「っ……はぁ……はぁ……っ！！」

白騎士は、乱れた息を必死に整えていた。

白銀の鎧はあちらこちらがボロボロとなり、顔を隠していたバイザーの一部が斬り裂かれ、その奥に黒い瞳が見える。

対する異形も機体の各箇所に傷を負い、黒煙を上げている。

大砲も機銃も弾薬を使い切り、ブレードのエネルギーもわずかしかない。

二機は足を止めて、睨み合っていた。

『ちーちゃん、そろそろ撤退の時間だよ』

「あぁ、分かっている……。だが、こいつを倒さなければ……それも難しいだろうな……！」

こちらが撤退の動きを見せれば、即座に斬り捨てる。

眼前に佇む異形は、むかつく程にその闘志を漲らせていた。

『【ドクター】より、ＥＨ－？へ。そろそろディナータイムだ』
「……チッ、タイムアップか。最後まで……ダメ？」
『最期までやり合えば……どちらかが確実に墜ちる。今、その機体を失わせる訳にはいかない』
「……オーケー。〈エンディミオン〉、撤退するわ」

「……何？」
白騎士はその動きに驚く。
異形は徐々に後退していくのだ。そしてその高度を段々と上げていった。
「撤退するのか……？」
『……ちーちゃん』
「――　分かっている。ステルス起動……撤退する」
白騎士の姿が、黄昏の空に溶けていく。

そして――　衛星、レーダー、全ての包囲網から消え去ってしまった。

空母へと帰還した異形〈エンディミオン〉は、着艦態勢に入り、ハンガーに上がったロックユニットに機体をロックされる。

「――　よっと」

コックピットブロックのロックが外れ、パイロットが艦へと降り立

った。
センサーユニットを兼ねたフルフェイスを外すと、汗に濡れたブロンドの髪を海風に晒した。
「お疲れ様、ジニー」
と言って、クリントが冷えたゼリードリンクを投げて渡す。
「はぁ……出来るなら、シャンパンを飲みたいわね」
「丘に帰るまでは諦めて欲しいね。それで、どうだった……ＩＳは？」
「凄かった……あの性能と取り回しの良さは、正しく革命的ね。博士の予見通り、あれは世界にカルチャーショックを与えるわ……この子と同じようにね」
ゼリードリンクを飲みながら、傷ついた愛機に振り返る。
ボロボロになりながら、しかしそのツインアイはどこか誇らしい印象を与えていた。
稀代の天才・篠ノ之束が生み出した、マルチフォームプラットスーツ〈インフィニット・ストラトス〉。

ＮＡＳＡ所属の若き天才、クリント・ハワードが作り上げた最強の戦闘機エンディミオン。

開発コードネーム――――　〈アインハンダー〉。

【白騎士事件】。
そう呼ばれた戦いは、二機の時間切れによるドローという結果で終幕した。

この後、日本に対してＩＳの技術開示――　そしてアメリカに対してＥＨの技術開示を迫る。

アメリカはこれに反発したが、しかし他の国々全ての圧力は、世界有数の大国たるアメリカでも、跳ね返すことは出来なかった。

ＩＳとＥＨ。

一機で他国の軍事力を圧倒する性能を持った、最強の機動兵器。
そして世界で唯一、それに対抗しうる性能を持った最強の戦闘機。

世界はその危険さに、運用制限条約を締結。

後に【アラスカ条約】と呼ばれる規制条約が、ここに結ばれる。

それから十年。
世界の空は、この二勢力によって争われる事となった。

（後書き）

アインハンダー。
私がすっごく好きなシューティングです。

ブレードはロマン。ジュノーなんて気持ちいい。
フラッシュ、カノン、男ならゼロ距離スプレッダーだ！w

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2272t/

白の騎士 VS 戦場の死神

2011年10月8日10時11分発行